1：まだ、何も知らない

　どうしてこんなことになったんだっけ、ルーカスは茹だった頭で何度も考えるのに、すぐに霧散してしまう。思考を巡らせようとするたびに、ルーカスに覆いかぶさるオルガが邪魔をするからだ。
　俺の腰を掴んでいるオルガが、尻の中に突っ込んだチンポで浅い場所にある気持ちいい部分を抉ってくる。

「ッあ、ッ♡♡こんなっ♡あっ♡♡あ゛♡あぎッ♡♡ひぃ♡♡ぃ゛いい♡♡オルガやめ、♡ぇ゛　゛う゛、ッ……♡♡」
「やめろ、じゃないだろ」
「ふ、ぅう゛、んッ、あ゛！！♡♡んぎッ♡♡あっ♡♡ぁあ゛♡♡」

　ぐり♡ぐり♡と続けてそこを押し上げられ、ベッドにへばりついたまま仰け反ったルーカスの体がブルブルと震えた。
　腹の奥が温かくなってきて、溶け出すように頭がふわふわしてくる。何度も味わわされたアレがまたくる。アレがくると気持ちいいのが続いて訳が分からなくなって、何も考えられなくなってしまう。
　駄目だと思うのに、体が期待してオルガが動きやすいように腰を上げてしまう。

「っ、腰上がってる……またいく？」

　察したオルガに指摘されて、恥ずかしさに顔が熱くなる。汗で湿った金髪を掻き回して感覚を散らそうと身悶えても、体はもう止まらない。ルーカスの気持ちを裏切って、どんどん昇っていく。

「はー…っ♡は…っ♡♡あッ♡♡いっ♡♡いくっ♡♡♡——ッあ、くる、くるっ♡♡あ♡あ♡かってにぃ゛い♡♡」
「ナカだけでイクのはもう慣れたみたいだな……っ」
「あっ♡あ゛ッ♡♡い、ぐ♡い゛ぐッ♡♡♡う゛ぅううう゛……っ！！♡♡♡」

自分でも分かるほど強くオルガのチンポを締め付けてしまいながら、押し寄せてくる絶頂からどうにか逃れようとシーツを掴む。
何とか尻の中のチンポを抜こうとずり上がるのに、オルガはルーカスの腰を掴んで引き留めてきた。

「あッ゛！？♡♡やめっ♡♡♡っ♡ぬいて、ぇえ♡♡」
「奥でもイケるようになろうな……」
「ひぐぅう゛う゛……！！♡♡♡」

ズドン♡と最奥まで叩き込まれ、衝撃に見開いた青い目からぶわりと涙が溢れ出た。
腹の奥を暴かれる痛みと苦しさに、絶頂が混じり合って溶けていく。ただでさえ身の内から込み上がるアクメを持て余しているルーカスは、半ばパニック状態でもがいた。けれどオルガに強く腰を掴まれ逃げることができない。

「あ゛ッ♡♡っお♡ぉ、お゛っ♡♡♡んぎッ……♡♡♡い゛ぅっ♡♡ぁあっ♡あ゛ーッ♡♡♡」
「は、っ……ほら、さっきみたいにゆっくりするから」
「あ゛ッ♡ぁ゛♡やぇえ゛っ♡♡♡そごぉおッ♡♡やめへぇえ♡♡」

腰に食い込むオルガの指が鈍い痛みを訴えるのに、体はお構いなしに腹の内からの快感を拾い上げる。ゆっくり、と言ったとおりに緩慢なピストンを繰り返され、ルーカスは枕にしがみついて耐えるしかなかった。

「あぁ……♡ッあ゛ぅ♡♡ぅう゛ッ♡」
「上手にイケるようになったな」
「や、ぃやだ♡ぁ、あ゛ッ♡♡」
「こんなに気持ちいいのに？ほら、ここだって」

前かがみになったオルガの指先が、ルーカスの乳首を摘まみ上げる。鋭い刺激にビクッ♡と跳ねあがったルーカスの肉壁が、咥え込んだチンポを強く締め付けた。

「あっあっ♡や♡乳首やだ♡ぁ゛うッ♡♡」
「ほら、弄ると締め付けてくる」
「んひッ♡ぃ゛あ♡」

こりこり♡と指先で転がされて、潰されて捏ねられる。すっかり快楽に弱くなった乳首がジンジンとして、それが腹の奥に溜まっていく感覚があった。

「やらっ♡あっ♡あ゛っ♡い、く♡乳首いやらっ♡あ゛ぅう♡いぐ♡♡いくっ♡」
「イッて」
「あ♡いぐ♡ィぐッ♡う゛ッ……ッ♡♡んぅう゛ぅう゛ッ！！！♡♡♡」

深くまで犯され乳首を虐められて、限界を迎えたルーカスはあっけなくメスイキする。射精せずとも腹の奥で続く絶頂は、長く尾を引いた。

「ぅ、あ♡あぁ゛……ッ～～♡♡」
「もう尻に咥え込んでないとイけなくなったね」

未だメスイキから降りられないルーカスに、オルガが囁く。否定したいのに、ゆるゆるとピストンされるチンポに媚びる肉筒がオルガの言葉を肯定してしまっていた。

「ほら、イったばっかりなのにナカがしゃぶりついてくる」

ずるぅ…♡と引き抜かれると反射的に締め付けてしまい、奥へ押し込まれると全身が粟立つ。シーツに縋りついて堪えるルーカスを、オルガは容赦なく揺さぶった。

「ぁはッ♡あ゛ッ♡あ゛ッ♡ぁ゛ッ♡あ゛ッッ♡」

トン♡トン♡と小刻みにノックしながら責められれば、すっかりオルガを受け入れたアナルが柔らかく蠢く。オルガの言うとおり、肉筒は熱いチンポをみっちりと締め付けて蠕動し自分で気持ちよくなってるみたいだった。

「あぇっ♡んおゞッ♡♡ちがっ♡♡」
「違わないだろ……素直になれよ」
「ゃ、やだ♡あっ♡やだっ♡ぁぁゞッ♡」
「可愛いな、ルーカス」
「～～～～ッッおゞ、ッッ……！！！♡♡♡」

耳元に落ちてきた甘い囁きに、腹の奥の何かがゾワッと沸き立つような感覚があった。どちゅっ♡と腰を強く押し付けられると全身に電流が走ったみたいに痙攣し、頭の奥で何かがはじけて真っ白になる。途端に抗えない大きな波が広がり、湧き出る多幸感に意識が蕩けた。

「ぉ♡♡ぁ……ッ♡♡ッッ……♡♡」
「覚えが良くてよかった……ルーカスは優秀だな」

全身をブルブルと振るわせて絶頂に耐えるルーカスの身体は、アクメに達しながらも健気にオルガのチンポを締め付け、胎内の痙攣で扱くように阿る。その撓む背中をいたわるようにオルガが何度も口づける。

「ふぅゞッ♡♡つぐ……♡♡……おゞ……♡♡」

ずるぅ♡とゆっくりカリ首近くまで引き抜かれたチンポが、またゆっくりと押し込まれる。メスイキの痙攣が残る肉壁の感触を愉しむようなピストンは、絶頂を引き延ばしてルーカスを苦しめた。
それでもどこか心地よくて、理性もプライドも快楽に蝕まれて崩壊しそうになる。けれどそれを享受してしまえば、後戻りできなくなるのではという底の見えない恐怖がある。自分の体に起きていることが怖くて、このまま変になっていくのではないかという不安がある。ルーカスは必死に自分の理性に縋った。

「や、ぇ゛ぇ……ッ♡とまれッ♡オルガ♡♡腰、止め……ッぉ゛♡♡」

　枕にしがみついていた片手で背後のオルガを押し退けようとするが、逆に腕を掴まれて軽々と引き寄せられる。

「あッ♡♡ぉお゛……♡♡……ッッ♡♡」

　背後にオルガの熱い体が密着し、大きな手がルーカスの下腹を引き寄せながら自分の腰を押し付けてくる。痩せ型のルーカスの薄い尻を押し潰すように密着し、チンポが奥の奥を拡げていく。

「ぉ゛……ッ♡おぐっ♡っほ、ぉ……ッッ♡♡♡」
「奥まで入ってる……」
「ッぅう゛……♡」

　内臓を押し上げられるような感覚。肉筒全体がオルガの形に拡張され、チンポを擦り付けられるたびにゾクゾクと快感が湧き出た。

「あっ♡ぁぇ、っ？♡あぇ、っお゛、ぉ♡♡」
「ルーカスに才能があって嬉しいよ」

　オルガの手のひらが下腹を撫で回す。熱い体温が下腹に沁み込むうちに、腹の深い場所が疼くような気さえしてくる。短いストロークで奥を突かれると、疼きは甘い刺激になって脳髄へ突き抜けた。

「ぉ゛ん゛ッ♡んッぅ゛♡お゛ぐっやだ♡ぅ゛う゛……っ♡♡」
「そうか？ナカはそんな風に言ってないけどな」
「っ、……――ッお゛！！！♡♡♡」

　笑みを含んだ声が耳元に落とされ、ぱんっ♡と軽く腰を打ち付けられる。たったそれだけで、ルーカスは駆け上がる強い快感に背が折れそうなほど反り返った。

「ほら……な？」
「や、おるが♡もぅ、やめ♡ッ♡」

　振り返った先のオルガの情欲に満ちた目に、この淫虐がまだ続くのだと察して半ば恐怖を感じて視界が滲む。腰に回る腕を振り払おうと掴んでも、騎士団で鍛え上げられたオルガには敵うはずもなかった。

「ルーカスは口より体の方が正直だから」
「いやッ、だ♡ぁ、そこ♡……ッぁ、あ♡」

　両脇から手を差し入れたオルガが、ルーカスの両胸の乳首を摘まむ。散々弄り回されぷっくりと大きくなったそれを、人差し指と親指で挟んで揉みしだく。

「あっ♡♡やめへ♡おるがっ♡やぇえっ♡♡」

　柔い乳首を捏ねられる感覚が、下腹の疼きと一緒にルーカスの快感を高めていく。逃げようと腰を揺すれば、深々と突き刺さったチンポに内壁を擦られ、ビリビリと腹の奥から電流が駆け抜ける。

「っ、あっ♡あっ♡あ゛っ♡あっ♡……」
「乳首も気持ちいいもんなぁ」
「ぁあ、やっ♡……ッ♡♡ぉお゛ッ！♡♡ッお、ぐっ♡」

　グッと引いた腰が叩きつけられ、衝撃に揺れたルーカスのチンポから押し出されるように先走りが跳ね散った。

「ルーカス、俺もイっていいよな……？」

　湿った声で囁かれ、ダメだと頭の隅が冷たくなる。なのに下腹はぎゅうッ♡と引き絞るように熱く疼いて、腹の中のチンポを締め付ける。

「ふふ、ナカは俺の子種が欲しいって」
「ちが、ぁ゛♡っちがぅ゛……ぅ゛あ゛ッ♡あ♡ッあ゛♡♡」

オルガの手が、ルーカスの身体に巻きついて肩と胸を押さえ込んだ。どうにもならない圧迫感と、満たされるような安心感が同時に訪れる。

「ッお、ぁ〝♡お〝っ♡だめっ♡」
「駄目じゃないだろ、……っ」

緩慢に刻まれていたオルガのピストンが、射精を目指して激しさを増す。チンポが抜き挿しを繰り返すたび、媚びるように肉襞が吸い付き、掻き出されるように粘液質な水音が響いた。

「オルガっ♡ぁ、あ〝ッ♡あっ♡♡ぉお〝ッ♡あっ♡あ〝ッ♡」

強く突き上げられても、ルーカスが縋れるのは拘束するように体に絡みつくオルガの腕しかない。腹の底から押し寄せる快感を逃すために爪を立てるシーツも枕もなく、揺さぶられるまま喘ぐしかなかった。

「やだっ♡やぇ〝えっ♡っだめ、ぁ♡だめ、ぁ♡あッ♡あ〝ッ♡あ〝ぁッ♡」

絶対的な力の差、体格の差に泣きたいような惨めな気持ちになる。
圧倒的な雄に屈して、メスのように鳴き媚びるしかできない自分にも。屈辱的なはずのそれが理性すらぶち壊してしまいそうなほどの快感を与えられ、心のどこかで悦んでしまっているのもだ。

「ルーカス、ッ……ルーカス……」
「ッやらっ♡ひぐっ♡♡ぅ〝う〝♡っぉ〝お〝……♡」

オルガの呼吸が荒くなり、噛み殺したような喘ぎが落ちてくる。肩口に吸い付かれ、頬擦りされる。ルーカスの身体を好き放題弄んでいるくせに、乱暴な腰つきも強く抱きしめてくる両腕もオルガの強い執着を感じさせた。

「あ〝ッ！♡や、だ！♡♡♡っほ、お〝ぉ〝……ッ！ ！♡♡♡」

「もっ、と、奥まで……ルーカス……」

　オルガの膝がルーカスの足の間に押し込まれ、グイ、と大きく開かされる。身体に巻き付いていた両手がルーカスの腰を強く掴み直して、己の欲に突き動かされるまま激しく腰を叩きつけ始める。

「お゛ぅッ！！♡♡ひぃ゛っ！♡あ゛ッ！♡う゛ッ！♡うぅ゛う〜〜……ッ！！♡♡」

　オルガに支えられて起こしていた上半身は、突き上げの強さにあっさりとベッドに崩れ落ちた。さっきまでしがみついていた枕に顔が埋まり、押し付けられる。

「んぶっ♡♡んぅう♡お゛ッ……♡い、ッぅぐ♡♡♡ふぅ゛うう♡」

　グジュ♡ヌチュ♡と粘着質な音と、肌を打ち合う音がひっきりなしに響く。慄く肉壁をオルガのチンポが押し拡げて擦り上げ、前立腺を抉って奥を叩かれた。柔らかく蕩けてまとわりつく媚肉を巻き込みながら引き抜き、また突き上げる。

「ぉお゛っ！♡あ゛っ！♡い゛っ♡♡ぁあ゛っ♡お゛ッ♡お゛ッッ！♡」

　オルガが突き上げるのに合わせて、ルーカスの喉からは悲鳴のような嬌声が迸った。尾てい骨から脳髄を駆け上がっていく恍惚が、頭の奥で感電するように弾ける。

「ぐっ♡あ゛ぅっ♡ひぐっ♡ぅ゛♡♡おるがっ♡」

　潰されたカエルのような格好でベッドに這いつくばるルーカスに、オルガが体を倒して覆いかぶさってきた。熱を持ったルーカスの耳元で、男の荒い息混じりの声が響く。

「出していいか、ルーカス……」
「ゃだっ！♡ぁあ゛っ♡やめっ♡なかやだっ♡」

「っ……中に注いでやるから、もっと感じろ」
「いゞやっ♡あっ♡あゞぁゞっ！♡♡」

　耳に溶けた言葉に、腹の奥が熱く疼いた。言葉とは裏腹に、ルーカスは腰を上げオルガのチンポに媚びて締め付けてしまう。

「あッ！♡♡ああっ♡いゞっ♡やっ♡ぁ、あぁあゞっ！！♡♡」

　どちゅっ♡と奥を何度も叩くような激しいピストン。内臓が圧し上げられて苦しいのに、その苦しさがねっとりとした熱を引き連れてルーカスを満たしていく。
　上から肩を掴まれて押さえ込まれ、逃げ出そうと伸ばした手はシーツを握り締めるだけだった。

「ひぐっ！！♡♡いゞあ、あゞっ！！♡♡おくだめゞっ♡そこっ♡♡ぉおゞっ♡♡♡」
「イくぞ、ルーカス……っ！」

　射精に向けてオルガがラストスパートをかけ始める。ピストンの激しさが増していくのに伴って、肉筒に擦れるチンポはさらに硬さを増して膨張していく。

「ひぐッ♡ィ、ぐぅッ♡♡あ、くるッ♡きちゃ、ッ♡いぐ、いぐっ♡♡♡ッひ、いいゞっ……！！」

　頭の中がスパークして、熱いものが腹の底から込み上げてきた。激しく揺さぶられながら、全身を甘く痺れるような快感が襲う。じゅわり♡と脳髄が蕩けるようなメスイキの陶酔感に、全身が震えて止まらない。

「ぁぁ……ッ♡♡……〜〜ッ♡♡♡」
「——ッは、……ぅゞ、ッッ！！」

　ぎゅうぅッ♡と締めつけた媚肉に、オルガも低く呻く。奥に押し付けられたチンポからザーメンが噴き上がり、ルーカスの腹を満たしていく。

「――ッ！！♡♡♡♡ぉ゛ッ♡♡ぉお゛……ッッ♡♡♡」
「っ、ふー……っ♡は、ッ……」
「ひぃ♡……ッ♡♡や、おるがっ♡」

最後の一滴まで絞り出そうとするように、肉筒の中でチンポを出し入れされる。肉壁を擦られて身悶えるルーカスの腰を掴んで押さえつけながら、無慈悲に。

「あッ♡あぁ♡まだイってるっ♡やだっ♡こするなぁ、ぁ゛う♡」
「ルー、ルーカス……こっち見て」

じゅぶ♡じゅぽ♡とザーメンを擦り込みながら、オルガはルーカスの肩を引いて振り返らせた。見上げたオルガの顔は、満足げな恍惚が浮かんでいるのに目だけはまだ飢えたようにギラついている。

「ぁ゛……♡♡♡おるが♡は、ぅ、んぅ゛……ッ♡♡♡」

後頭部を掴まれ、顔を背ける間もないうちに口づけられた。半開きの唇に舌が入り込んで、濡れた口腔を舐め回す。舌を絡め取られ、ちゅく♡と音を立てて吸われる。柔く噛んで、唇を舐められて口内を犯されて。

「ンッ♡っ、♡ぅ、♡ぅう♡♡」

オルガの好き放題に弄ばれているのに、メスイキの余韻に耽溺したルーカスは抵抗できない。間近で揺らめく緑色の瞳が、やけに印象的だった。

＊＊＊

ルーカスが初めてオルガに出会ったのは、まだ生まれたばかりの頃だった。オルガの母親はルーカスの乳母として雇われ、その縁もあり5歳のオルガも屋敷に招かれた。
もちろん物心がつく前のルーカスは覚えていないが、ルーカスの母親も、オルガの母親もこぞってその時のことを嬉しそうに語ってくれた。

「初めまして、オルガ」
「初めまして奥様」

オルガはとても礼儀正しい子供だった。5歳にしては落ち着いていて、聡明で、周りをよく見ていた。丁寧に頭を下げて挨拶をした彼に、ルーカスの母親は手招きをして呼び寄せる。
足音を立てずにそっと近寄ってきたオルガは、ルーカスの母親に導かれるままその腕に抱かれて眠るルーカスを覗き込んだ。

「この子はルーカス、あなたの方がお兄さんね」

呼吸すら、潜めているようだった。手を伸ばすわけでも声をかけるわけでもなく、オルガはじっと赤子のルーカスを見下ろす。
白い肌、金糸のような柔らかい髪。ふくふくした頬と、赤い唇。幼い頃のルーカスは、天使のような可愛らしい赤子だった。

「よろしくね、オルガ」

音もなくルーカスの目が開いた。大きなまん丸い青い瞳が、午後の光を浴びてキラキラと光る。

「あ……」

ジィッとルーカスを見ていたオルガと、起きたばかりのルーカスの視線が交わった。静かな緑色の瞳と、澄んだ青い瞳。

「ん、んぅ……」
「まあ」
「あらあら」

喃語を漏らしながら伸びてきた小さな手が、オルガへ向かう。傍で見ていたオルガの母親も、ルーカスの母親も物怖じしないルーカスの様子に頬を緩めた。

「ルーカス……」

オルガのまだ子供の手が、ルーカスの手をそうっと握る。お互いの体温が伝わって、オルガは小さくため息をついた。

「初めまして、僕はオルガ。よろしく、ルーカス」

小さな囁き声で、オルガは握った手を少しだけ揺らしながらルーカスに声をかけた。それが刺激となったのか、ルーカスは足をばたつかせながら、にぱぁ、と満面の笑みを浮かべた。

それから、オルガは片時もルーカスのそばを離れなかったと聞いた。世話に関しては乳母であるオルガの母親を手伝うということしかできなかったが、その献身っぷりはオルガの母親を凌ぐほどだったらしい。
それは成長しても、変わらなかった。小さな子供にありがちな直情的なあからさまさはなりを潜めたが、それでもオルガは誰の目で見ても明らかにルーカスを可愛がっていた。

それから時が経ち、ルーカスが6歳になった頃だ。
夏の暑い盛りに食欲が落ちたルーカスを、療養のために母親と領地内の別荘へ向かうことになった。息子の体調を心配し、両親で話し合った結果だと聞かされはしたが、その実、当主になるための英才教

育を受けている兄の邪魔であったのだろうとルーカスは今でも思っている。
　ルーカスは公爵家の次男で、4歳上の兄ファオスはルーカスと同じ6歳の頃にはすでに跡目を継ぐための教育が始まっていた。そして2年後の12歳になる頃には寄宿舎付きの学び舎に入るための試験が待っている。そのために、ファオスは専属の家庭教師たちと毎日勉学や運動に励んでいた。
　そんな家に、夏の暑さごときで体調を崩しかける弟がいれば、当主の父親としては邪魔に思っても仕方ない。乳母とその息子だけを付けて別荘へ追いやるのも当然と言えば当然だ。母親がついてきただけ大事にされているとも思えた。

「オルガ！湖だ！」
「落ちるなよ、ルーカス」

　それでもルーカスは、オルガと一緒に居られることが楽しかった。11歳になるオルガも試験を控えており、ファオスと同じく勉強や鍛錬に忙しくてあまり会えなくなっていたからだ。
　もっとも、代々騎士を輩出している男爵家のオルガは兄のファオスとは違い、訓練兵として騎士団に入団する予定だった。寄宿舎があり、外出も管理されていることからしばらくは会えないと言われていた。

　深い森の中に立つ別荘は、貴族が使う建物にしては珍しく1階しかない低層の館だった。木々によって日光を直接館に当てないことを目的に作られたらしく、館の中はいつでもひんやりとしていた。だがその反面、室内はいつも薄暗い。
　ルーカスはこの別荘があまり好きではなかった。昼でも廊下は灯りがいるほど暗いし、木の床はときどきギシリと軋む音がする。どこか陰鬱として、子供の恐怖心を煽るには十分だった。
　その屋敷から徒歩で行ける場所に、小さな湖があった。広さはないが、桟橋も設えてある。訪れるものが少ない湖はいつも澄んでいて、晴れた日にはキラキラと太陽の光を反射させる。
　その日は、ルーカスの発案で、湖の側の木陰でピクニックをすることになったのだ。

「ルーカス、あまり湖に近づいてはダメよ。日も当たるし、あなたはまだ泳げないのだから」
「大丈夫ですお母様！少し見るだけですから」

　涼しい館での生活で、ルーカスはすぐにいつもの調子を取り戻した。数少ない、心を許せる者だけがいる空間が心地よかったのもあるだろう。食欲も睡眠も、すぐに戻っていた。

「オルガ、ここに魚はいる？」
「ああ、いるよ。こんな大きなのが」

　桟橋の突端に膝をついて湖を覗き込むルーカスに、オルガは大きく手を広げて見せる。今思えば、小さな湖にそんな大きな魚がいるわけないのに、その時のルーカスは真面目に信じ込んだ。

「お前なんか一飲みだ」
「そ、っそれは、……嫌だな」
「そうだろう？ほら、もう戻ろう。昼飯が先だ」

　ギ、と木の軋む音をさせてオルガが戻っていくのを感じ、ルーカスもあわてて立ち上がった。腰が上がり切る前に踵を返した瞬間、バランスが崩れて体が後ろへ引っ張られる。背中を向けているオルガに手を伸ばしたが、届くはずもなく視界は青い空一色になり強い太陽の光が差し込んだ。

「っあ……！！！」

　眩しさに目を瞑ると同時に、ルーカスは冷たい水の中へ落下する。仰向けに沈んだ身体が、一瞬にして冷えた水に包まれた。水面に揺れる青い空と太陽の光を見ながら、必死に手足をバタつかせる。
　だが濡れた服が体にまとわりついて手足が上手く動かない。泳ぎ方を知らないルーカスは上手く浮かぶことができず、すぐそこに水面があるのにそれ以上身体が上がっていかなかった。

「ッ……！ッゴ、ボっ……！！」

　ふと浮かんだのは、さっきのオルガの言葉。大きな魚に、一飲みにされてしまう。恐怖からパニックになって、ジタバタと足を動かした。けれどルーカスの思いとは逆に、身体はゆっくりと沈んでいく。
　死、という言葉が、ルーカスの脳裏に浮かぶ。それは全身を浸す水よりも冷たく、魚に食べられてしまうより恐ろしい言葉だった。

「ルーカス！！」

　劈くような大きな声と共に、腕を掴まれ身体が急激に引き上げられる。力強い腕に抱き込まれると同時に、水面から顔を出すことができた。

「ぶはっ……！！ッ……ゲホッ、……！！」
「大丈夫だルーカス、もう平気だ。しっかり掴まれ」
「お、おる……ッごほ！！」

　噎せるルーカスを片腕で抱き、オルガが水面を蹴って泳ぐ。桟橋から上がることは不可能だと判断したのか、湖の岸の方へと移動していく。

「っげほ……！お、おる、っ……おるが」
「大丈夫だルーカス」

　底に足が届くようになってもルーカスはオルガにしがみついたまま、オルガもルーカスの身体に腕を回したまま離さなかった。水を含んだ重たいはずのルーカスを抱き上げたまま、オルガは岸辺にたどり着く。そこまで来てようやくオルガはルーカスを地面に降ろし、へたり込むルーカスの背中を撫でた。

「気持ち悪いなら吐き戻していい」

言われるまま、込み上がってきたものを吐き出す。びちゃびちゃと音を立てて溢れるのは、飲んでしまった湖の水ばかりだ。吐き気が収まらず、何度も嘔吐いた。

「大丈夫だ、ルーカス」
「う、っうぅ……ぅ、……ッひ、……おるが、っ……」

背中を撫でるオルガの手の温度と感触が、ルーカスに生きている実感を与えた。それはルーカスの緊張の糸を解すには十分で、泣きじゃくりながらオルガにしがみついた。自分と同じく全身ずぶ濡れのオルガの身体は、それでも暖かかった。

「大丈夫だ」

オルガは冷たいルーカスの体を抱きしめて、大丈夫だと言い続けた。オルガの言葉は呪文のように、ルーカスに染み込む。

「だ、大丈夫？！ルーカス！」
「オルガ、ルーカス様はっ……」

照りつける日差しの暑さと揺らぐことなく抱きしめてくれる温かいオルガの身体に、ルーカスは徐々に落ち着きを取り戻していった。だが駆け寄ってきた母親と乳母に顔を覗き込まれてもオルガから離れることはできなかったし、オルガの腕が離れることもなかった。

「すぐに屋敷へ。湯の準備を」
「はい！」

母親の声に乳母が先んじて屋敷へ駆け戻る。腰が抜けたのか上手く歩くことができないルーカスをオルガが抱え、母親の先導で屋敷へと戻った。

風呂の準備ができたとき、ルーカスは全裸で何枚ものタオルに包まれたうえでオルガに抱えられていた。オルガも濡れた服を脱いではいたが、下穿きとタオルを肩から掛けただけの軽装だった。

「傍にいたのに、ルーカス様を危険な目に遭わせてしまいました……申し訳ありません」

オルガはルーカスが落ちてしまったことで罪悪感を覚えているようだった。浴室の入口でオルガの母親である乳母と一緒に頭を下げるオルガに、母親はゆっくりと首を振る。

「オルガ、それは違うわ。あなたが助けなければルーカスは今ここにはいない。謝罪をしなければいけないのは私よ、あなたにルーカスを任せてしまった私なの」

オルガの言葉を遮るように、ルーカスの母親は強く言い募った。ルーカスが幼い頃からオルガと接していることを知っているからこそ、母親もオルガがルーカスを守ってくれると思っていたのだ。

「ですが」
「お母様、僕が悪いのです。オルガは注意してくれたし、戻ろうと言ってくれてた。僕がよろけてしまって……ごめんなさい」
「えぇ、えぇそうね。誰も悪くないのよ。ルーカス、あなたが無事でよかったわ」

水に落ちた恐怖を思い出して泣きだすルーカスのまだ濡れた頭を撫でながら、母親は微笑んだ。

「さあ、早く体を温めないと。本当に風邪をひいてしまうわ。ゆっくり浸かるのよ」

母親が立ち去り、湯気が立ち込める浴室の中でオルガはルーカスを包むタオルを全て捲り取ってから浴槽へ向かった。

「僕、一人は……」
「ああ、俺も一緒に入る」
「いいの？」

普段ならあり得ないことだ。使用人と主家の子供が一緒に風呂に入ることは禁止されていた。そのことに気が付いて不安を滲ませるルーカスに、オルガが答えた。

「風呂の中でも、溺れないように隣に座るだけだ。さあルーカス、手を」
「うん」
「ゆっくり、湯の中に」

湯に足をつけた途端、寒さに縮こまっていた体が弛緩する。それを見ていたオルガはゆっくりとルーカスの体を浴槽に座らせる。

「冷えてるな」
「オルガは、寒くない？」
「俺は鍛えてるからな」

まだ11歳でありながら、オルガは周囲の子供よりも体格が良かった。日々の鍛錬のおかげもあるだろうが、元よりオルガの家の男はみな背が高く筋肉のつきやすい性質のようだった。

「日に焼けてる。僕は真っ白」
「外で鍛錬するから。ルーカスだってその内こうなるかもしれない」
「僕も？」
「ああ。だってルーカスは次男だろう？家はファオス様が継ぐことになるだろうし、ルーカスは大人になったら他の仕事を探さないと。ずっとあの家にはいられないだろう？」
「……そっか」

浅黒く日焼けしたオルガの腕を眺めながら、ルーカスは少し寂しくなった。

父親は領地の経営と次期当主の兄の教育に忙しい。次男のルーカスとの交流は少なかった。母親もルーカスの世話は乳母に任せることが多く、普段は父親の手伝いや社交に励んでいる。
家族と過ごす時間が少ないルーカスは、オルガもいつか自分の傍を離れてしまうのかと思ったからだ。

「騎士団には俺がいるよ。ルーカスも入るか？」
「でも、僕体を動かすのは好きじゃなくて……」
「そうだったな」
「それに、危険な仕事じゃないの？お母様が言ってたよ」
「そうだな。でも騎士になれば、俺は何でも手に入れられる。守りたいものが守れる」

オルガはいつになく真剣な目をしていた。

「僕も守ってくれる？」
「もちろん」

迷う素振りすら見せない即答の裏にどんな意味があるかなんて6歳のルーカスに見抜けるわけもなく、彼の答えを親愛の情として受け取った。

「だけどルーカス、今日の振る舞いは良くなかったの、わかるだろう？」
「うん……」
「次期ご当主のファオス様に何かあったときの予備として、ルーカスがいるんだ。ルーカスは公爵家として遜色ない振る舞いをしなければならない。それができないのであれば、ルーカスは予備としての役割さえ失ってしまうよ」

父親は時折顔を合わせても、聞かれるのは勉強の様子や普段の行いが良いかということばかりだった。
役割を失う、そう言われて泣き出しそうな不安に襲われる。

「反省してる……」

「そうだな。ルーカスは分かってくれると思ったよ。母君に謝ることができたのも偉かったな」

　頭を撫でられて、ルーカスはほっと息を吐き出した。

「もう、湖には近づかないことにするよ……」
「しばらくはその方が良いな。まあ、もし二度目があっても、また俺が助けるよ」
「ほんと？」
「ああ。何度でも」

　この頃のルーカスにとって、オルガは年上の優しい友人で、頼りになる兄のような存在だった。実際の兄ファオスとは同じ家に住んでいてもほとんど顔を合わせることも、親しく話すことも少ない。ファオスと同じように忙しい毎日を過ごしているはずなのに空いた時間があれば顔を見せてくれるオルガに、ルーカスが懐くのも当然と言えた。

　湖での事件後も、オルガは空き時間にはよく顔を見せてくれた。ルーカスの勉強を見てくれたり、一緒に体を動かしてくれたりと甲斐甲斐しく面倒を見てもらったと思う。
　とはいえ、ルーカスも公爵家の人間としてオルガと遊んでばかりはいられない。幼い頃から、それなりの社交術を身に着ける必要があった。その前段階として、同年代の貴族の子供たちとのお茶会が開かれるようになっていた。
　少し人見知りの気があるルーカスはそれが億劫で、予定が合えばいつもオルガを同席させていた。

「だから僕は使用人に言ってやったんだ。お前みたいな者は必要ないって」
「それでどうなさったの？」
「それで終わりさ。アイツはクビ。新しい使用人がすぐにつけられた」

　今日の相手は伯爵家の嫡男と公爵家の御令嬢で、嫡男の方はまだ5歳になったばかりだというのに自分が貴族だという自覚が強いのか、

普段の口調も振る舞いも尊大だった。逆に言えば、貴族として適切な振る舞いが身に付いているということだ。ルーカスの兄ファオスほどではないが、その年の子供としては教養にも長けている方だろう。

「新しい使用人はちゃんとした方なの？」
「当然だろ。前の奴とは違う」
「それは良かったですね」

　話を聞く限り、平民の子供に対して暴力を奮ったようで、それを咎められたからクビにしたようだ。子供の些細な喧嘩、と言われればそれまでだが、平民を下に見ている節があった。
　サンルームは個室ではあるが、それぞれが連れてきた使用人が控えている。個室であるからと言っても、使用人には平民もいる。そんな場でする話ではないなと、ルーカスは思う。
　階級意識がきちんと根付いているのは悪いことではないが、そこで芽生えてしまった選民意識を隠しもできずに露呈させてしまうのは子供なら仕方ないのかもしれなかった。

「そういえば、オルガはもうすぐ騎士団の訓練兵になるんだろう？」
「はい」

　嫡男が、ルーカスの隣にいるオルガへ話しかける。オルガは失礼にならない程度に言葉少なく頷いた。

「騎士団と言えば、オルガのお爺様も騎士団長だったんだろう？じゃあもう剣の鍛錬もしているの？」
「ええ。木剣ですが」
「へえ、すごいな。僕は剣なんか持ったこともないよ」
「オルガは強いんだ」

　ルーカスが思わず口を挟んだ。剣なんか、という言葉に、貴族特有の嘲りを感じたからだ。
　オルガの家は代々騎士を輩出しており、王様に認められるほどの功績を残した人物が何人もいる。父親は剣術や武術が得意でなかった

ために士官となっているが、叔父は王直属の近衛騎士団員として立派に勤めていた。
　この頃、特に上級貴族の界隈では、武力で民を守る騎士団や兵団のことを野蛮だとこき下ろすのが流行っていた。すでに戦の時代は終わり、これからは産業や貿易で国を支えていかなければならないという風潮が広まっていたからだ。王に近い貴族たちが、そういう者たちであったからだろう。

「この前だって、」
「ルーカス、いいんだ。大げさだよ」

　言い募ろうとしたルーカスの言葉を、他でもないオルガが遮る。テーブルの下で分からないように手を握られ、ルーカスは口を引き結んだ。
　話しかけた話題が気になった嫡男が促しても、オルガは微笑んで首を横に振るだけだ。話すつもりはない、と言外に告げている。

「何だい？話してみなよ」
「大したことじゃないです。私はまだ訓練兵ですらないので」
「ふぅん。……まぁ、興味もないけどね」

　面白くなさそうに鼻を鳴らす嫡男に、オルガはただうっすらとした笑みを浮かべるだけだった。
　ルーカスにはわかる。オルガは謙虚にへりくだっているように見えて、内心を悟らせないよう表に出さないことに決めたのだ。それこそが貴族のやり方で、振る舞いでもある。
　6歳のルーカスにできないことが、11歳のオルガにはできる。大した運動もできない、しない貴族の子供たちとは明らかに違った体つきも、堂々と伸びた背筋もルーカスの憧れになるには十分だった。

「ねえオルガ、どうしてさっきは止めたの。あまり喋らないし、おかげで面白くない話をずっと聞かされる羽目になった」

　皆が帰った後、ルーカスはケーキの残りをつつきながら聞いた。頭では分かっていても、やはりオルガを下に見られるのは我慢ならない。

「俺は男爵家の人間で、爵位が上の方々には自分から話しかけることができないんだよ」
「……それは、知ってるけどぉ。でもオルガは僕の兄弟みたいなものじゃないか」
「ルーカス」
「僕はオルガのことを兄上みたいだと思ってるよ。いつも頼りになるし、助けてくれる。色々教えてもくれる」

　オルガはルーカスの座る椅子の側に跪くと、ルーカスの手をそっと取った。大きな手に包まれて、ルーカスの手もじんわりと温かくなる。

「ありがとう、ルーカス。嬉しいよとても」

　蕩けるような笑みは、さっき伯爵家の嫡男に見せたものとは雲泥の差だった。彫りが深く意志の強そうな切れ長の目がやわらかく解けて細められ、薄い唇が緩む。それだけで、オルガの印象はガラリと変わる。けれどそれが向けられるのはルーカスだけだった。

「ルーカスは優しいね。けれど、貴族がみんなそうではないというのは分かるだろう？」
「う……ん」
「貴族として暮らすなら、社交は必要だ。でも心を開いて親しくなる必要はない。身分が下の俺を受け入れてくれるルーカスを、蔑むようなことを言う人間もいるだろう」

　今日の伯爵家の嫡男だって、男爵家のオルガを下に見ていた。蔑むとは言わないまでも、騎士団の訓練兵になることを大したことじゃないと言わんばかりの様子だった。
　ルーカスとオルガが仲良くしていれば、分不相応だとか、貴族としての自覚が足りないとか言い出すかもしれない。ルーカスはそう思って、想像だけで嫌な気持ちが込み上げる。

「そんな奴は……」

「そうだ。そんな奴に心を開く必要はない。上辺だけを撫でて、それなりに付き合っていけばいいんだよ。彼らの言葉の有益な部分だけを拾って、心を動かされる必要はない」

　わかる？と聞かれて、ルーカスは頷いた。オルガがそう言うなら、そうするのが正解だ。幼い頃は、本気でそう思っていた。

2：檻の中

「朝だぞ、ルーカス」

　大きな熱い手に肩を揺すられて目を覚ますのはもう慣れてしまった。上質な広いベッドの上で、ルーカスは薄い寝着をまとって上掛に包まっていた。

「ん……」
「朝飯ができた。良い匂いだろう」

　ベッドのヘッドボードに凭れて座ったオルガが、ルーカスの身体を引っ張り起こして足の間に座らせる。サイドボードに置いてあったトレイを二人の膝の上に置くと、そこには朝食が並んでいた。
　柔らかいパン、スクランブルエッグとカリカリに焼いたベーコン、オレンジとリンゴ、温められたミルク。簡単なものばかりだが、オルガがルーカスのために作ったものだ。

「何から食べる？新鮮なフルーツもある」

　火傷しない程度に温められたミルクのカップを手に取り一口すするルーカスの背後から、オルガが問いかけてきた。背中から尻にかけて感じる体温を、この期に及んでもルーカスは不快に思ったことがない。
　昨日の夜の無体が嘘のように、オルガは甲斐甲斐しくルーカスの世話を焼く。

「なあ、何回も言うけどさ、自分で食べられるしそっちにテーブルあるだろ」
「俺が食べさせたいんだ。ほら、今日はスクランブルエッグが上手くできた。トロトロだ」

スプーンですくって口元へ近づけられ、ルーカスは不承不承唇を開く。オルガの言うとおり、スクランブルエッグはトロリと濃厚で塩加減がルーカスの好みだった。

「ん、……」
「美味いか？」
「うん、美味い」
「そうか」

そうか、の一言でオルガがどれほど喜んでいるかが分かる。ちぎった柔らかいパンを差し出されてそれを口に入れると、つむじの辺りにキスを落とされた。

「あ……」

パンは程よく温められ、中にバターが仕込んであった。噛み締めるとじゅわ、と口中に芳香と塩気が広がる。

「バターを中に押し込んでから温めてみたんだ。ルーカスはトーストに乗ってる溶けたバターが好きだっただろ？」

思わず振り返ると、オルガは噴き出すように笑ってルーカスの頬を撫でる。咄嗟に口の中のパンを飲み込んでしまい、ごくり、とやけに大きな音がした。

「なん、だよ」
「美味しいって顔全体が言ってる」

あからさまに感情を顔に乗せるのははしたない。貴族たるもの、いつでも冷静に鷹揚に構えていなければならない。
そう教わっていたルーカスは、オルガの指摘に羞恥を覚える。

「ルーカスは、素直でかわいいな」

なのに、オルガはことさら嬉しそうに笑う。子供の頃に見せてくれた、蕩けるような笑みを浮かべて。

「お、大人の男にかわいいってお前……」

素直でかわいいなんて、本当に小さな子供の頃に言われたきりだ。それもオルガ以外の人から。
オルガから、そんな風に言ってもらったことはなかった。別に不満はない。
公爵家の次男として、ルーカスは貴族的な立ち居振る舞いを身に付ける必要があったから、素直だのかわいいだの、言われるのは貴族らしくないと言われているようで不服だったからだ。

「ずっと思ってたよ。昔から」

とはいえ実際に言われると、何だか面映ゆい気持ちになる。オルガの表情がそうさせているとルーカスは思う。
愛おしさが溢れんばかりの瞳が、ルーカスを、ルーカスだけをじっと見つめて言う。それが、妙に甘くて暖かくて、落ち着かなかった。

「じゃあ、俺は少し買い物に出かけるから」
「あ、オルガ、俺も……」
「ルーカスはここで待ってろ」

トレイを持ったオルガが、柔らかい口調ででもはっきりと拒絶する。そうして出ていく背中を、ルーカスはベッドの上でただ見つめているしかなかった。
扉はオルガだけを通し、ルーカスの前で閉じる。ガチャリ、というカギのかかる音も添えて。

「……」

部屋はさほど広くない。キングサイズのベッドと、小さなテーブルと椅子が二つだけ。それで部屋は一杯だ。主寝室ではないのかもしれない。
けれど、そろえられた調度品はどれも一級品だと分かる。実家にあるものに近いからだ。

「カギは……」

ルーカスはベッドから降りると、室内履きの柔らかい革靴を履いて部屋の扉にそっと近づく。
ドアノブに内から鍵を開けるための仕掛けはない。こちらに鍵穴があるということは、本当に外から閉じ込めるための部屋なのだろう。
隣の部屋がバスルームで本当に良かった。排泄の自由まで奪われていたら、頭がおかしくなっていただろう。

ルーカスはオルガによってこの部屋に閉じ込められていた。

念のためにドアノブを捻ってみてもやはり扉は開かない。引っ張ってみてもドアは揺れることすらしなかった。

「はあ……」

もう何度も確認した。ここの鍵はオルガが持っていて、許可がなければ決してルーカスを出しはしない。
最初は、オルガが入ってきたときを見計らって逃げようとした。横をすり抜ける前に捕まって、ベッドに放り投げられた。
扉の陰に潜んで、隙を突こうともした。同じ結果だった。

部屋に唯一ある窓へ向かう。オルガの手によって開けられたカーテンの向こうは、鉄の格子が嵌められていた。
どうやらこの部屋は二階であるらしい。窓の下は土がむき出しの地面だ。例え格子がなくても、飛び降りるには勇気がいる。
景色は木々だけ。遠くに山々が見える。一方向からしか見えないので断定はできないが、森の中のようだった。

「なんで俺がこんな目に……」

　実家を追い出されそうになっていたとき、オルガが気晴らしに酒でも奢ると言ってくれてついて行ったらこのざまだ。
　ルーカスの記憶は、オルガと二人で街にある酒場で飲んでいたところで止まっている。気が付いたら、この部屋にいた。

　この部屋で、最初の記憶はオルガに犯されたことだ。
　彼はルーカスの目が覚めるまで待っていたという。初夜を酔っぱらって記憶のないまま終わらせるのは嫌だから、と。
　ルーカスは手足を縛られ、訳も分からないままオルガに好き放題された。
　その時のことはあまり思い出したくない。脳裏にちらりと浮かぶだけで、羞恥で体が熱くなる。

「くそっ……！」

　腹立ちまぎれに鉄格子を殴りつける。もちろんそんなことで鉄格子が外れるわけもないが、ギシ、と鉄格子と木の枠の継ぎ目が軋んだ。
　古い建物なのか、木の枠が傷んでいるようだった。

「……」

　ルーカスは痛む手を擦りながら、その部分をじっと見下ろす。
　振り返った先には、オルガによって整えられた部屋。部屋に物は少ない。
　ルーカスが持ち上げられそうなのは、イスぐらいのものだ。

「イスで殴ればいけるか……？」

　だが大きな音が鳴るだろう。

オルガは買い物に行くと言っていたが、もう家を出たのかは分からない。部屋は玄関と反対方向にあるのか、出入りの音は全く聞こえなかった。
椅子で鉄格子を殴れば大きな音が立つ。オルガにバレて、修復されるのはまずい。

「これは、機を伺う必要があるな」

言ってみたものの、差し当たってやることはない。ルーカスは寝着のままぐるりと部屋を見渡し、本棚に近づいた。
どうやって集めた本なのか、ルーカスの興味を惹くものばかりだ。この国の歴史書から、外国の文化や風俗の書かれた本、世界各地への旅行記、珍しい生き物図鑑、役に立つ植物図鑑。そうかと思えば、ミステリー小説や荒唐無稽な冒険譚もある。

「俺に作家にでもなれって言うのか……」

ぶつぶつとぼやきながらも、ルーカスはその中の一冊を手に取る。
一人の男の旅行記だ。若い男は、失恋を機に旅に出た。そんな書き出しから始まる。

「……」

ルーカスは本から顔を上げないまま、狭い部屋を移動してイスに座る。足を組み、頬杖をついてテーブルの上の本を捲った。ページを押さえる指先でトン、トン、と紙を軽く叩くのは集中しているときの癖だった。
部屋には時計がない。それが逆に、ルーカスの集中力を高めた。

「……ーカス、ルーカス」
「っ！？」

声をかけられて初めて、ルーカスはオルガが目の前に立っているのに気づいた。朝と同じトレイを持って、彼はそこにいた。

鍵を開ける音も、部屋に入ってくる音も聞こえなかった。それぐらい、ルーカスは集中していた。

「びっ、くりした……」
「ずいぶん集中してたな。もう昼だぞ」

本をテーブルの上から退けると、そこへトレイが置かれる。
肉と野菜がゴロゴロ入ったシチューと朝と同じ柔らかいパン、それからフルーツがそれぞれの器に盛りつけられていた。
朝からほとんど動いていないはずなのに、よく煮込まれたシチューの匂いを感じると途端に空腹感が湧き出てくる。

「何を読んでた？」
「旅行記。けっこうおもしろいよ」

若い男は貴族の三男坊だった。婚約者を他の男に取られ、傷心を癒すために旅に出た。最初は、国の端にある港街。潮の香りと快活な市場の様子に元気をもらい、街には出回らない海産物に舌鼓を打ち、酒場の女性と打ち解けた。早朝の砂浜を二人で歩くシーンは、恋愛小説のようだった。

「魚を生で食べるらしい。生臭くないんだろうか」
「どうだろう、今度やってみるか？」
「嫌だよ。これは獲れたてだからできることだ。こっちの魚じゃ腹を壊す」

ルーカスの座る側に、カトラリーはない。朝と同じように、オルガが使うスプーンで一口ずつ食べさせられる。パンをちぎって口に入れるとき、太い指先が触れて指先と爪の硬い感触にドキリとした。

「……、街娘っていうのは、ああも簡単に靡くもんなのかな。一晩酒を飲んだだけで」
「何か通じるものがあったんだろうさ。金や得じゃない、二人の間にしかない何かがな」

「わからないなぁ……、なんだよオルガ」

　偶然出会った二人。とはいうが、夜に酒場で一人で飲んでいる女性などルーカスはお目にかかったことがない。そういう女は決まって商売女だが、旅行記には女性は市場で働いていると書いてあった。つまりは平民だ。
　二人はどんなことを話したのか。本文には夜通し語り合ったとしか書いておらず、内容は分からない。どんな会話をすれば、朝に寄り添って砂浜を散歩する仲になるのか。しかも仲睦まじく、手を繋いで、だ。
　ルーカスが考えている間にも、オルガはせっせとルーカスの口に食事を運ぶ。歯ごたえのある鹿肉は香辛料で煮込まれて柔らかく、濃厚な味がする。パンによく合う濃い味で、一緒に煮込まれている野菜なんかはトロトロだ。

「いや？お前が夢中になってて楽しそうだから、俺も楽しい」
「そうか……？」
「ああ」

　確かにオルガの言葉通り、久しぶりに読む本は面白かった。内容は面白おかしい失敗談や珍道中といったものばかりだが、それはそれで息抜きになる。
　実家では常に何かしらを学ぶための本しか読んでいなかったルーカスにとっては、とても久しぶりのことだった。

「っ」

　ぽん、と頭の上に手が乗せられる。そのまま梳くように髪を撫でられて、ルーカスは俯いてシチューを飲み込んだ。
　オルガに触れられるのは慣れている。小さい頃から頻繁にしていたので、それが当たり前になっているだけだ。オルガから触れられれば、ルーカスはそれを拒否することはなかったし、逆も然り。

「ッ」

けれど今はいつもと違う。オルガの触り方にあからさまな甘さがある。髪から滑り降りた指先が、ルーカスの首筋を撫でて鎖骨をくすぐった。指先の熱が移ったのか、体がじわ、と熱を持つ。

「っオルガ」
「何だ？」

何でもないようにオルガはルーカスに問う。何でもないわけがないのに。この触り方は、夜、ルーカスの身体を弄り回すときの手つきだ。散々に慣らされた体は、ルーカスの意思と関係なくその動きに反応した。
朝が来る回数を数えて今日で9回目。多分ではあるが、この部屋に閉じ込められて9日ほどが経っているはずだ。オルガは毎日、夜になるとルーカスを抱いた。最初の夜に犯されてから、ルーカスは毎日体を開かれた。
この鎖骨に触れている指先が、どんな風に肌をすべり、急所を見つけ出し、または思ってもみない場所で快感を得られるようにしたのかを、まざまざと思い出してしまう。

「ッ……♡」
「ルーカス、フルーツがまだ残ってる」

薄っぺらな寝着の上から乳首を撫でられ、ルーカスの身体が僅かに揺れる。細められたオルガの目に、薄暗い欲が見え隠れした。
そのままルーカスから手を離したオルガが、小さなフォークに刺したリンゴを唇に触れさせる。口内に押し込まれ、皮ごと噛んだ。甘酸っぱい果汁が広がり、唾液と一緒に飲み込む。

「うまいか？」
「うん……」

緑色の瞳にじっと見られている。欲を覗かせた緑色の瞳が、ちょっと触られただけで、ツン、と立ち上がった乳首を見ている。ルーカスにも

分かるようにそうされて、意識してしまう。気を散らそうと大きく息を吸ったら、布が擦れて乳首に刺激が走った。

「食べたら散歩に行こう。あまり閉じこもるのも良くないだろう」
「ん、うん……♡」

　じっとりと湿った視線で見てくるくせに、オルガは素知らぬ顔で言う。どの口が、と頭の隅では思うのに、ルーカスの口は果物を咀嚼するだけだ。
　確実に作り替えられている、そんな思いが浮かんですぐに消えていった。

＊

　昼食を食べた後、少し休んでからオルガは本当にルーカスを外に連れ出した。
　さらりとしたシャツとズボンを着せられたルーカスは、靴さえオルガに履かされた。幼い子供ではないのだから、着替えぐらいは自分でできると言ってもオルガが引かなかったからだ。あまり怒らせて外出がなしになっても困るなと思って、それ以上強くは言えなかった。

「今日は天気がいいな」
「……あぁ、そうだな」

　ルーカスの部屋はやはり二階で、屋敷はそれほど大きくない。周囲は深い森で間違いないようだった。踏み固められた砂利道が屋敷の玄関の前から森の向こうへ続いており、そばには厩もある。
　オルガは砂利道ではなく、屋敷の裏に回って森の中を進み始めた。こちら側は砂利道ではないものの、人が通る場所だけは草木が刈られているようで、柔らかい草を踏みしめて歩く感触がなかなか面白い。辺

りは背の高い木に囲まれて、枝や葉の隙間を縫って落ちてくる日の光が心地よかった。

「なあ、オルガ」
「ん？」

　散歩はいい。環境も悪くないし、気温も最適だった。けれどルーカスは、うんざりした顔で手を持ち上げて見せる。
　ジャラリ、と自然の中に似つかわしくない音がして、手首に重さがかかった。手枷だ。繋がっている鎖の先はオルガが握っている。

「何だよこれは」
「ルーカスはすぐにあちこち行くだろ？危ないからな」
「あのさ……」

　そこで、ルーカスは言葉に詰まった。どう答えたらよいのか、どう答えるべきなのか。
　手枷を付けなくても逃げたりしない、なんて、明らかな嘘だしオルガも信じないだろう。オルガに嘘をつくのも気が引けたし、意味のない嘘をつく気にもなれなかった。

「ルーカスはあの時も大丈夫だと言って湖に落ちただろ？」
「そ、そうだけど……そんな子供の時のこと」

　オルガがルーカスを閉じ込める目的でここへ連れてきたのは明らかだ。言葉にしてオルガがそう言ったことはないが、行動が物を言っている。
　散歩に連れ出すのも、ルーカスのご機嫌取りだというのは分かる。ルーカスがこの生活に納得していないのは、オルガも知っているだろう。

「結局、あの後もルーカスは泳ぎを覚えなかった」
「っ、泳ぎなんていらないだろ！街には泳ぐようなところはないんだから」

湖に落ちて溺れかけたことで、ルーカスは今でも泳げない。水に入るのが怖いのだ。息ができなくて、どんなにもがいても沈んでいく、あの日浮かんだ死の気配を振りほどけないでいる。
だがそれを人に知られるのは癪で、いつもそうやって泳ぎは必要ないと切り捨ててきた。オルガ相手にそれをやっても、通じないと分かっているのにだ。

「そうか？あぁ、この辺りはあの湖の近くなんだ。暑くなったら傍まで行ってみてもいいな」
「へえ、そうか」

夏の暑さに負けたルーカスが療養として過ごした日々は、溺れかけるという事件もあったが楽しい日々だった。
母親と乳母、そしてオルガ。四人だけの生活は、父親の目も使用人の目もなく誰にも振る舞いを咎められない。次男とはいえ公爵家としての自覚を求められてきたルーカスにとってひと時だけの自由な日々だった。
水は怖くても、あの湖のことはよく覚えている。今と同じように、木漏れ日の差し込む森を抜けた先、開けた場所で日の光を跳ね返してキラキラと輝く水面。

「懐かしくなってきた。なあオルガ、今から行こう」
「また今度な」

はぐらかすオルガに、ルーカスは唇を尖らせる。別に逃げようと思っているわけではない。本当に、あの湖が懐かしくて、また見てみたくて言っただけだ。けれどそれを口に出すのは、この生活を受け入れたと思われるようで嫌だった。

「さあ、そろそろ帰ろうか」
「え？もう？」
「ルーカスは久々に外に出ただろ？あまり長くいると疲れてしまうし」

もう屋敷は見えないぐらいに離れており、辺りは木々に囲まれている。日が傾いてきているのか、木漏れ日は赤みを強くしていた。

「もうちょっとだけ、なあオルガ」
「ダメだ」

手枷がついていても、やはり外というのは室内とは違って開放感がある。少しでも引き伸ばしたくて言い募るが、オルガは首を横に振った。
幼い頃も、我儘を言うルーカスを突っぱねるのはいつもオルガの役目だった。こういうとき、彼は絶対に引かない。

「でも」
「ルーカス、ほら行こう」
「ッあ……！」

ぐい、と手枷を引かれて、オルガの方へ倒れそうになる。危なげなく抱きとめたオルガの腕が腰に回って、さらに体を引き寄せられた。
受け止めてくれたオルガの身体は硬くてしっかりとしていた。腰に回った腕も太くて、ルーカスが身を捩ることもできずに密着させられる。ルーカスのほうが背が低く、臍の下辺りに触れるモノに気づいてしまった。

「あ……」

オルガのチンポはまだ萎えたままだが、その大きさは十分だった。皮膚の下、腹の奥に収められるそれの感触を思い出して、触れた下腹からぞくり♡と疼きが込み上げる。
そうなるともう、なし崩しだった。腰に回るオルガの手が腰を掴んで後ろから突き上げられたことや、その大きな体に組み敷かれて全身でオルガの素肌を感じたことを思い出してしまう。

「ルーカス……？」

腰に回っていた手が背中に這い上がり、抱き合うような姿勢で耳元に声を吹き込まれた。さっきまでの声とは違う、湿り気を帯びた声だ。

「こんな外で……思い出した？」
「あ……♡」

柔らかい唇が耳元に触れて、ルーカスは肩を竦める。くすぐったいだけだったはずなのに、漏らした声は甘さが混じっていた。
オルガの両手がルーカスの頭を挟む。上向かされて、唇を押し付けられた。息苦しくなったところで口を開けた隙間から、ぬる、と舌が口内に入り込んでくる。

「っんぅ、ん、……ッ♡ん、ふ……ぅ♡♡」

顔を固定した手が耳を塞いでいて、口の中で舌の絡む音が響く。ぐちゅ♡ぬちゅり♡と生々しい音が直接頭の奥に届いて、抵抗しようと胸についた手に力が入らない。
音がするたび、舌同士が擦れ合うたびにうなじの辺りをぞわぞわとした感覚が走った。脳髄に溶けたそれが腰に滑り落ちて熱を持つのがもどかしく、膝を擦り合わせて耐える。

「ぅ……、っん、ぁ゛……♡」

熱い舌が出ていっても、ルーカスは薄く口を開いたままだ閉じられない。熱にぼやけた頭でオルガを見上げ、その唇から自分を貪っていた舌先が覗くのを見つめているだけだった。

「発情した顔してる」

二人の唾液塗れの唇を親指で拭われて、笑みを含んだ声で言われる。揶揄われていると分かっているのに、頭は働いてくれなかった。

「こんなところでしたら、誰かに見られるかもしれないな」
「っ……」

そこまで言われてルーカスはようやく思い出した。そうだ、ここは外だった。深い森の中ではあるが、どこかにルーカスたちの住む屋敷と同じような建物があって人が居るかもしれない。

「お、おい」
「大丈夫だ。誰もいない」

狼狽えて引こうとする腰を、オルガの腕が捕まえる。逃げられなくなったルーカスの足を割って、オルガの膝が股座へ割り込んだ。そのまま膝を股間に押し付けられる。

「っやめ、オルガ！あ……ッ♡」

ぐり♡と膝で圧し潰されたチンポに堪らず上げた自分の声がやけに艶めいていて、ルーカスは慌てて片手で自分の口を覆った。
今までオルガに触れられ続けていた身体は、連日の行為の記憶でルーカスの意思に関係なく体を昂らせる。

「ふふ、声出してもどうせ誰も来ないさ」
「んんっ♡」

爪先立ちになっても、オルガは容赦なくルーカスのチンポを圧し上げる。自分の身体とルーカスの硬い太腿に挟まれ、ごりゅ♡ぐりゅ♡と揉みくちゃにされると堪らない愉悦が込み上げた。

「ん、んゞっ♡ふ、ぅゞ……っ♡♡」

口を押さえる手の下で、声がこぼれる。上がった息の間から漏れるそれは、興奮した男のそれというよりは羞恥と媚の混じった嬌声だった。

「こんな外で、興奮して……はしたないな」
「っんゞ♡んゞ♡ぁ……っ♡」

詰るような言葉も、欲情を秘めた低い声に喜色が混じっている。オルガは、外で抱かれた記憶を思い出して発情した自分を喜んでいる、そう思うと羞恥と共に胸の奥が熱くなるのも感じた。

「んゞっ♡い、ぅう……っ♡♡」

オルガの両手が、ルーカスの尻を掴む。布地の上から大きな手で掴まれ、拡げるように揉みしだかれる。強く握られると同時に太腿でチンポを圧し潰され、痛みにも似た強い快感にルーカスの腰が震えた。

「あっ……！♡♡」

ビク、と強張った腰が、オルガの太ももにチンポを擦り付けるような動きをする。腰から頭に劈く刺激に、ルーカスはオルガに両手でしがみついた。

「っ……ぁゞ、う♡」

じぃん……♡と痺れるような余韻を残して、快楽が引いていく。下着の中で勃起し先走りを滲ませたチンポが、脈打っていた。

「ん……♡つぅゞ♡」

余韻はすぐにもどかしさを連れてきて、ルーカスは熱いため息を零す。気が付くと、オルガの手も足も止まっていた。

「お、るが……♡」

伏せていた顔を上げて見上げる。視線が絡んで、それだけで胸の奥に期待が膨れ上がる。

「ルーカス」
「ぁ……♡」

緑色の瞳と目があったまま、ゆっくりと唇が重ねられる。顔を背けないと、と理性が叫ぶのに体は動かなかった。

「ん♡……ッん、ぐぅ♡♡んゞ♡ふ、ぅゞ♡んゞ♡んゞ♡」

柔らかい粘膜同士が擦れる。ザワつくような感覚が、ルーカスを突き動かした。
最初は遠慮がちに、へこ…♡へこ…♡と腰を揺すって、チンポをオルガの太ももに擦り付ける。オルガに舌を吸われ、口内を貪られながら拙い腰振りでチンポを擦っていた。

「んっ♡ンゞ♡ぁゞは……あゞっ♡ぅゞん♡♡」

足りない、もどかしい、もっと、と脳裏に欲求が閃く。ぬと……♡と唾液の糸を引きながら唇が離された後も、ルーカスはオルガの首に手を回してより密着するようにしがみつき、つま先立ちの足は逃げるためではなく押し付けるように体重をかけた。

「っふ♡っふぅゞ、うッ♡んゞぅ♡うゞっん♡♡♡」

オルガの指先が口内に差し入れられ、熱く蕩けた粘膜を掻き回す。その硬い感触すら気持ち良くて、ルーカスは自分からも舌を絡めた。そうしながらオルガの太ももに腰を叩きつけるようにして激しくチンポを擦り、グリュ♡グリュ♡と捏ねる。どんどん大きくなっていく音は、卑猥な水音に変化していった。

「んゞっ♡んゞ♡おゞっ、んゞっ♡ぉゞんゞッ♡♡♡」

膝に力が入らなくなって震え始めたルーカスの背中を、オルガの大きな手のひらが支えた。口内を掻き回していた手がウエストの隙間から入り込んで、尻肉の奥へ伸びてきた。

「ふ、……♡おゞッ……♡♡♡」

滑った指でアナルをなぞられ、ぞわぁっ……！♡と全身を抜けていく愉悦に身体が強張る。下半身から駆け上がってくる気持ち良さにルーカスの思考は持っていかれ、もう射精のことしか考えられなかった。ヒクつくアナルを押し拡げられる感覚すら、どうしようもなく気持ちいい。

「～～っっ！！！！♡♡♡」

オルガにしがみつく腕に力を込めて、ルーカスは足をぴん♡と突っ張らせる。声にならないアクメ声を上げ、オルガの鍛えられた太腿にチンポを押し付けて射精した。
強張った全身が何度か痙攣するのと同じタイミングで、腰の奥から電流のような快感が迸った。チンポが下着の中でピュク♡ピュク♡と小さく弾けて、ザーメンを噴き上げる。噴き上げるタイミングに合わせてアナルが収縮し、オルガの硬い指を締め付けると得も言われぬ悦楽が腰を蕩けさせた。

「お゛、……ぅ゛、ッ♡♡♡」

オルガの腕の中で力が抜けたルーカスは、情けなくチンポをオルガの太ももに擦り付けながら小さく震えていた。指でアナルを掻き回されて、絶頂感を長引かされているせいだ。

「ッ……ほ、ぉ゛……！♡♡♡お゛、っぐ……♡♡」

ブルッ♡と背筋を震わせて、また腹の中の指を締め付ける。体勢のせいで、オルガの指はアナルの浅い場所をほじくるばかりで奥までは到達しない。当然、オルガのチンポとは長さも太さも雲泥の差で、それがルーカスの腹の奥を疼かせた。

「ふぅ゛、ぅ゛……♡♡ぅ゛、あ゛……♡♡」
「……こっちにまでザーメンが垂れてきてる。ほら、音がこんなに」
「んぃ゛っ♡あ゛ッ♡ぁん゛っ♡♡あ゛♡」

ちゅぶ♡ちゅぼ♡と音を立てて、アナルに指が出し入れされる。服の下で噴き上げたザーメンが流れて、ルーカスのアナルを犯すオルガの指に絡んでいた。ヒクヒクと収縮しながらオルガの指を締め付けるが、それだけでは足りるはずもない。腹の奥が、もっと大きな、圧倒的な質量を求めていた。

「お、おるが……♡ぁ、っあ〝♡」
「ん？」

射精したばかりのチンポを太ももに擦り付けながら、ルーカスは切羽詰まった声でオルガに訴えた。遠慮がちに、そっとオルガの股間に手を伸ばす。
そこが自分と同じように勃起しているのを布地を圧し上げる硬い感触で悟り、全身が甘く痺れるような期待に震えた。

「な、ぁ♡ぁ〝♡ッんひぃ……！！♡」

オルガの指が二本に増え、ルーカスのアナルを拡げる。自分のザーメンを使って中を擦られ、引き攣った悲鳴が漏れた。

「ん〝ぉッ♡♡ぉ、ほ……♡♡」

肉壁を擦られる愉悦にルーカスの体が震えたのは一瞬のことで、すぐに奥が切なくなってしまった。抜けていこうとする指を、アナルの縁がキュッ♡と締め付ける。
堪え切れず、大胆にもオルガのチンポを服の上から握り擦り始めてしまった。その大きさに触れて、さらに体が飢えを訴える。

「ぁ……、あ〝♡オルガ♡おる、がぁ♡」
「外で男のチンポ握って扱くなんて、誘い上手になったな」
「だってぇ♡あ〝ぅ♡っんん〝♡」

外にいるにもかかわらず、オルガに抱かれたのを思い出しただけで発情した。我慢しきれずに自分よりも逞しく鍛えられたオルガの太もも

にチンポを擦り付けて、アナルをほじられながら無様に射精し、満足しきれずにオルガのチンポに触れて扱いてしまってさえいる。
　頭の冷静な部分がやめろと叫ぶのに、火のついた身体はもう止まりそうもなかった。

「ここじゃあルーカスの望みを叶えてあげられないから」
「んぁ゛っ♡♡」

　じゅぷ♡と引き抜かれた指先は、ルーカスの体液で濡れそぼっていた。目の前でそれを見せつけられ、感じるザーメンの匂いに興奮が煽られる。

「さあ、そろそろ帰ろう。な？ルーカス」

　先ほど言われたのと同じ言葉に、今度は抗えなかった。

　オルガに抱えられ、ルーカスは屋敷に連れ帰られた。そのまま元の部屋に連れ込まれ、ベッドの上に放り出される。
　乱暴に落とされたのに、目の前のオルガが見せつけるように下衣をくつろげるから、そこから目が離せなくなった。

「誘われてるのは俺の方だな……」

　下着をずらして出されたチンポは、血管が浮き立つほどに勃起して先端から先走りを滲ませていた。マジマジとそれを見下ろして、見慣れないのはなぜだとふと引っかかる。

「お、おるが……」
「ん？」

　上の服も脱いだオルガが衣服をベッドの下に放り投げる様も、全て見えている。
　これまでは夜だったため、燭台の灯りしかなく薄暗かったせいだ。夕暮れ近くではあるがまだ外が明るく、カーテンも開け放したままの部屋

ではオルガの身体も自分の身体も全てが晒されている。鍛え上げられた肉体美を目の当たりにして、ルーカスはゴクリと喉を鳴らした。

「あぁ、すまない。忘れてた」

　サイドボードの引き出しに手を伸ばし、ガラスの小瓶を取り出してボードの上に置いたオルガがルーカスの腕を掴んで手枷に手を伸ばす。鍵で外されたそれもベッドの外に追いやられ、ガチャンと床にぶつかる音がした。

「明るい、から……」

　ぎゅ、と身を縮こまらせるルーカスの腰に手を伸ばしてウエストの紐を緩め、オルガは下着ごと下衣を引き抜いてしまう。日に焼けない白い肌が晒され、自分の足がオルガの腕ぐらいの太さしかなく筋肉の隆起すらないことに恥ずかしくなった。

「明るいと、ルーカスが全部見えていい」
「ッお、おれは……！ぁ♡」

　拒否する前に、ルーカスの膝を大きく割ったオルガが腰を寄せてくる。硬く張った亀頭がアナルに押し当てられると、もう何も言えなかった。

「大丈夫だ」
「っ～～……っ♡」

　サイドボードの上に置かれていた小瓶を取ったオルガが、見せつけるように中身を垂らす。ツ……、と細い糸のように落ちたそれは、淡い花の香りを伴いながらルーカスの会陰の辺りに触れる。冷たい香油の感覚に身を竦めたが、そこをぬ゛りゅん♡とオルガのチンポがぬめりをなじませるように擦った。

「あ゛ぅ♡ッう゛ぅ……♡♡」

膝裏を両手で押さえルーカスの足を開かせているオルガが、腰の動きだけでチンポを擦り付ける。アナルだけではなく会陰を圧し上げ、睾丸を押し退けて、チンポを擦った。ゆったりとした官能的な雄臭い動きに、ルーカスの興奮が煽られていく。

「ぁ、♡ふ、ぅん〝♡おるが♡ぁ〝、あ〝♡」

圧倒的に大きさの違うチンポに刺激されて、ルーカスのチンポはピクピク♡とのたうちながら勃起し始めた。ザーメンと香油が混じり合い、ルーカスの下腹を濡らしていく。

「お〝♡お〝♡ぅ、ん〝♡」

焦れて腰を揺すろうにも、オルガの手で押さえ込まれた足と伸し掛かられている腰で上手く動けなかった。
同じ男であるはずのオルガの身体はルーカスより一回りは大きく、しっかりと分厚い筋肉が全身を覆っている。明るい場所で見てみればあちこちに傷跡もあり、彼が騎士としての職務を忠実に全うしていたのだと分かった。
その鍛え上げられた身体が、ルーカスに伸しかかってくる。ヒクついてチンポを求めるアナルに狙いを定めた亀頭が、ぐ、と押し当てられた。

「ぅ〝、♡ひぃ……♡おる、が……ッ♡」

にゅぐ♡と硬い亀頭が肉輪を押し拡げる。ぞわぁ……♡♡♡と尾てい骨から震え上がるような快感がせり上がってきた。指とは比べ物にならない太さに開かれ、無意識に腰が逃げようとする。

「ッ……――ぉ〝、お〝ぉ〝……ッッ！！♡♡♡」
「……ッ、ふぅー……」

ゆっくり、ゆっくりとチンポが入ってくる。オルガは夜毎の行為でも、挿入だけは殊更に時間をかける。それは柔らかな粘膜を傷つけないように、というよりは己のチンポでルーカスの隘路を開いていると実感させるためのように思えた。

「お、る……が♡」

硬いチンポに肉壁を擦り上げられ、じっくりと拡げられる。オルガの思惑通りに、少しずつ開かれる肉壁は絶え間なくルーカスに快感を与えた。

「あ゛ッ♡あ゛ッ♡そこッぉ゛♡♡」

張り出したカリ首が前立腺を抉る。チンポの裏側を擦られ、ぴゅく♡とルーカスのチンポから先走りが飛んだ。待ちきれずに媚肉がチンポにしゃぶりついて締め上げてはそこから広がる愉悦を貪り、チンポをピクピクさせる。

「おるがっ♡おるがまって♡」
「ん、っ……？」

込み上げる射精感を堪え切れなくなりそうで、とうとうルーカスがオルガの腕を掴んで制止した。止めてほしいと言いたかったのに、ルーカスの膝裏を押さえたままのオルガの顔が性欲に歪んでいるのを見てしまった。

「あ゛……ぁ♡♡」

蕩け切った肉にチンポを扱かれ、時折息を詰めながら堪えている。少し潤んだその目が、うっとりと細められていた。そんな陶酔した顔を見せるのに、息を詰めるたびに鍛えられた腹筋が隆起し、大きな手でルーカスの足を押さえて開かせている様は雄の力強さがあった。

「痛い？」

「ちが、ぁあ゛……♡♡♡」

　オルガが自分に興奮している。明るい室内でまざまざと見せつけられ、ルーカスの胸の内を満たしたのは紛れもない悦びだった。じゅわ、と溶けるように体が解け、チンポを締め付けていた肉壁が奥へ誘い込むように蠢動する。

「奥まで入れるぞ」
「っまって♡ま、ッあ゛♡♡あ゛、ッぃ゛……♡♡」

　半ばほどまで入っていたチンポが、ずぐうぅ～～……♡♡♡と押し込まれた。同時にオルガの上体がルーカスの上に覆いかぶさってきて、体重をかけられる。

「ぐっ♡♡♡ぅ゛♡い゛ぐぃ゛…ッぐ、ぅ゛う゛……！！！♡♡♡♡」
「ん゛ッ……！！」

　びゅびゅっ♡とルーカスがチンポから噴き上げたザーメンが、二人の腹に散る。顔を真っ赤に茹らせてブルブル震えたルーカスが全身を強張らせ、ろくに身動きも取れないまま、アナルにチンポを挿入されただけで射精した。反動で絞り上げられたオルガが、ルーカスの足を押さえつけたまま唸る。

「ッ……♡♡ッは♡あ゛ッ♡あ゛ッ♡……ッひ、ぐぅ♡♡」

　体が跳ねるたびに肉壁がチンポを食い締め、絶頂感の波を齎す。射精してもなお、アナルを埋めているチンポがルーカスのアクメを長引かせた。

「はあ゛ッ♡は、ぁ゛♡おるが♡♡」
「……入れられただけでイったのか」

　チンポを挿入されただけでザーメンを噴き上げたルーカスの醜態に、オルガの顔が雄臭い笑みに歪む。ルーカスのチンポを易々と包み込

む大きな手に撫でられ、下腹に散ったザーメンを擦りつけられる。射精直後の敏感なチンポを嬲られて、ルーカスの内側が媚びるような動きでチンポを締め付けた。

「お〝、ほぉ〝っ？！♡♡」
「っ……堪え性までなくなったか？ん？」
「や〝め♡ぇ〝あッ♡あ〝、ぅ〝♡」

ずり♡ずり♡とチンポを擦られ、先端を親指で捏ねられる。びりびりと強烈な刺激は苦痛さえ伴ってルーカスを襲い、オルガの腕を握っていた手に力を込めた。

「っお〝♡おまえが♡ッやめないからだ♡ぁ〝♡もっと加減しろぉ♡」
「へえ？」

ひいひいと息を乱しながらついた悪態を、オルガは鼻で笑い飛ばした。そうして、上体を倒して覆いかぶさると膝裏を押さえていた手でルーカスの身体を抱え込み、身体を反転させて上下を入れ替えてしまう。

「何ッ♡や、っう〝…♡♡ぉ〝お〝ッ……！♡」
「ならルーカスが上になって動けよ」

突然下から串刺しにされ、自重でチンポが奥を叩いた。入れられただけで射精するほど欲していたチンポでみっちりと開かれ、ルーカスは腹の奥の重たい快楽に陶酔する。狭い肉の隙間を割り開き、腸壁を圧し上げる太い亀頭に思考が鈍る。

「ひッ♡い〝ッ♡あ〝……ぁ♡♡う〝♡う、ぅ〝〜〜……♡♡」
「自分で加減して動けよ、ほら」

くにゅ♡と腰を擦り付けるように揺らすと、オルガのチンポが奥を捏ねた。染み出るような気持ち良さが腰からせり上がって、つい何度も腰をくねらせる。

「お〝♡お〝ぉ♡お、るが♡ぁ♡あ♡」
「なあルーカス、そんなので俺が満足するとでも思ってるのか？」

　オルガの胸元に両手を置いて、控えめに腰を振るルーカスに挑発的な言葉が投げられた。同時に、中途半端に閉じられた膝を割り開かれ、ザーメン塗れのチンポもオルガのチンポを咥え込むアナルも曝け出された。

「ッオルガ♡」
「っしっかり、腰を振れ」

　文句を言おうとした声が途切れる。オルガの手が腰を掴んで持ち上げたからだ。抜けていくチンポに肉筒を強く擦られ、文句は獣のような喘ぎに変わった。

「んん〝っ♡♡ぉ〝お〝……ッ♡♡♡」
「抜いたら入れる」
「ッ、お〝ん〝ッ！！♡♡♡お、っほ……ぉ♡♡♡お〝ッう〝！！♡♡♡」

　どちゅん♡と腰を押し下げられ、オルガのチンポを一番奥まで迎え入れさせられる。下品な悲鳴が止められないまま、次の動きに備えて力を込めようとしたルーカスだが、それより早くオルガの手が再びルーカスを持ち上げた。

「ま、ぁ〝あ〝……♡♡」
「待たない、自分で動けるだろルーカス」

　ルーカスの両手はオルガの両手に握り込まれ、指を絡められる。そのせいで少し前屈みになったルーカスは、それでも言われるがまま震える膝に力を込めて腰を上げた。

「ッほ♡ぉ〝お〝♡ッ……んぉ〝ッ！！♡♡ぉ〝お〝……♡♡お〝♡♡♡おっ！！♡♡♡」

　またゆっくり腰を下ろそうとしたのを咎めるように、下から突き上げられる。
　奥を叩かれるたび、頭の中まで快楽に沈められるようだった。オルガのチンポは抜けるときも気持ちいい場所を擦ってくるのもあって、もはや自分で腰を落としているの突き上げられているのかも分からなくなる。

「お〝っ♡あ〝ぁ〝ッ♡おるがッ♡ひっい〝♡♡っぐ……ぅ〝！♡♡」

　オルガと繋いだ手を支えに、膝を思い切り開いたルーカスは腰を上下に振っていた。さっきまでの恥じらいの混じった腰振りとは違う、ガニ股で杭打ちのようなピストンだった。アナルでチンポを咥え込み、快楽を貪る雌の動きだ。

「っんぅ〝！♡♡ぅ〝あ〝♡あ〝♡あ〝ッ♡」
「ルーカス、……ッ……」

　オルガが下から突き上げるのを止めていることにも気づかない。ひたすら尻をオルガの腰に叩きつけ、ごちゅん♡ずちゅ♡と突き入れるチンポを肉壁が舐めしゃぶる。腹の内を満たす快感に夢中だった。

「ぎも〝ぢぃッ♡♡チンポ♡ごちゅごちゅ♡♡いい〝♡」
「もう腰止まらないな……」

　するりと絡んでいた指が解かれ、ルーカスはオルガの肩に手をつく。さらに前屈みになり、膝が開いてチンポが奥を抉った。脳髄を溶かす悦楽に、ルーカスの声が裏返る。

「お〝♡ほォ〝ッ！！♡♡おるがの♡チンポ♡奥♡お〝♡♡当たって♡♡♡あ〝う〝♡♡」

　チンポがどこまで入っているのか分かるように、オルガの手がルーカスの腹部を撫で、そこを示して指先が沈んだ。みっしりと内側を埋めて

いるチンポの形が、外からも分かりそうなぐらいに下腹が盛り上がっている。肉棒を押し上げた手が、そこを押してチンポに圧をかける。

「お〝ッん〟♡♡ちがう〝っ♡おるがッ♡♡ぁ〝う〝ッ♡」
「何が違う？こんなに良さそうな声出してるのに」

気持ちいいのに、あと一歩が足りない。まだ自分の弱点を把握しきれていないルーカスは、ただ腰を振り下ろしてチンポで肉筒を擦るしかできない。そのせいで、ルーカスの求める絶頂に届かないでいた。チンポだけはビクビクと震え、先端から先走りを滲ませるばかりだ。

「お〝っほ♡ぅ〝♡♡おるが♡♡い〝ッ♡イけない〝♡♡」
「ほら、ここだろ？」

腰に角度を付けて突き上げられ、チンポの角度が変わる。ごりゅんっ♡と抉られた場所から痺れ上がるような強い感覚が突き抜けて、ブルブルと膝が震えた。

「ひっぎぅ〝ッ♡♡……ッお〝♡♡♡ぞご♡ぞごぎも〝ぢい〝♡♡なんでッ♡♡♡」
「奥でしっかり感じてるな、いい子だ」

バチュンッ！♡バチュンッ！♡と突き上げられるたびに頭の中で火花が散る。あんなに腰を振っても自分では達することができなかったのに、オルガに数度突き上げられただけで体が昇っていく。

「い〝ぐっ♡イぐイぐっ♡ぅう〝っ！♡〜〜……ッッッ！！♡♡♡お〝！？！っんぎぃ！！♡♡」

ぎゅうう、と身を丸めてメスアクメに達したルーカスの肩を、オルガが強く掴む。先ほど腹の上に乗せたときと同じように瞬く間に上下を入れ替えられ、上から押し潰すように押さえ込まれた。チンポが奥にまで入り込んでいるため、メスイキで限界まで敏感になっている肉筒が勝手にチンポを搾り上げる。

「ッお゛、ぐ！！♡♡ぅう゛……！♡♡♡ひぅ゛ッ！♡」

　アクメも収まらないうちに腰を振られ、痙攣する肉壁を固いチンポが蹂躙していく。縋るものを探してさまよう手が、頭の下にある枕を強く握りしめた。快感から逃げようと捻る首筋に噛みつかれ、ピクンと体が跳ねる。

「ぃ゛、ぅ゛～～っ！！♡♡♡おるが♡ぉ゛あ゛ッ♡♡まらイッてう゛ッ！♡♡お゛ほッ♡」
「あぁ、かわいいな、ルーカス……」

　耳元に情欲の蕩けたオルガの吐息がかかり、ルーカスは背筋を戦慄かせた。雄の興奮に濡れた低い声は、ルーカスに淫らな劣情を灯す。

「お゛っ♡お゛ん゛っ♡うッ、ぅう゛う゛～～ッ！！♡♡♡」

　ビクビクと跳ねる体を抱き込まれ、全身で密着した状態で揺さぶられる。足まで絡みついているせいで、内側が押し上げられて圧迫感が増した。

「ぅ゛ッ……！♡♡ぉ゛ッ♡ぅう゛ッ……ッ…！！♡♡」
「またイく？」
「ま゛だいぐっ、う、ぅう゛……！！♡♡いぐいぐっいぐイぐ……っ！！♡♡」

　蠢動する肉筒を撫で擦られると、腹の内に渦巻く愉悦が爆ぜる。目の前がチカチカして、下腹が収縮した。背筋を仰け反らせてまたメスイキに堕ちる。

「っほ……お゛ぉッ……！！！♡♡♡～～ッッ……！！！♡♡♡」
「っふ……！」

　もう許して、とばかりに粘膜がチンポを締め付けるが、それを押し退けてオルガはピストンを続けた。直接頭の中を掻き回されるような快楽

を次々と与えられ、ルーカスは泣きじゃくりながら何度も何度もアクメを繰り返す。

「んぉ゛♡お゛ッ♡♡お゛ッほ♡♡お゛ッ♡ん゛、ぅ゛う……ッ！！！♡ん゛ッ♡♡ひっ♡ひぃっ♡♡んぎッ……いい゛ッッ！！♡♡♡」
「っ、何度もイける、ようになったな……ッ」
「ッッひぐっ♡♡ぉ゛お゛ッ♡♡おるがぁ゛♡ぉ゛、ぅ゛っ♡♡ひぃ゛ィッッ♡う゛ぅう゛…ッッ！！♡♡」

どちゅっ♡どちゅ♡と肉と肉のぶつかる音が激しさを増していく。ルーカスの腰を強く掴み、連続メスアクメで蕩ける媚肉を突き上げた。

「ぉ゛！♡もっぉ゛♡やめてっ♡ぇ゛あ゛……！！♡♡おるが♡ひ、っあ゛♡おるが♡こしッ♡とめて♡ぁ゛あ゛う゛ッんん゛っ♡♡」

とうとう、ルーカスがオルガに懇願した。止めろと命令するのではなく、嫌だと拒絶するでもなく。主導権がオルガにあることを認めて、繰り返すメスイキに耐え兼ねてプライドを放り捨てて縋りついた。

「そうだルーカス、っ、ちゃんとお願いできてえらいな……っ」
「——ッッ♡♡また♡ぁ……ッ！！またぐる゛♡♡いぐ♡んっんんん゛……ッ！！！♡♡♡」

咽び泣きながら、ルーカスは絶頂を享受する。震える足も強張る身体も全身オルガに押さえ込まれていて、ルーカスの好きにできるところは何一つない。オルガにされるがまま、法悦に乱れるしかなかった。
オルガの手が乳首に伸びてきたときも、それは同じだった。

「ルーカス、ここでもイけるように練習しよう」
「ッひぎぃいい゛ッ！！♡♡♡」

指の腹で押しつぶすようにされると、電流が走ったような快感が突き抜ける。あまりの衝撃に耐えられずに、ルーカスは悶絶するようにベッドをのたうった。

「あ゛ッ♡あ゛ッ♡ぉ゛♡ちくびッ♡っんん゛♡や゛あ゛ッ！！♡♡ちくびやえ゛っ♡♡おるが♡おねがっ、いまッ、っいまぁ゛……あ゛ッ！！♡♡」

乳首を捻られ、引っ張られ、痛いほどの刺激を与えられる。乳首からも尻の奥からも強烈な快感が迸り、アクメの最中なのに何かが込み上げてくる。ルーカスは泣きじゃくりながら、乳首を弄るオルガの手を剥がそうとしがみついた。

「んぅッ♡ぅ゛……！！♡♡おるがぁ゛、っだめ゛……！！♡♡♡ぁ゛、だめ♡あ゛、ぁ゛あッッ！！！♡♡」

ぷしゃっ♡と萎えたままだったルーカスのチンポから潮が飛び散った。決壊してしまったそれは、オルガがチンポを突き上げるたびに噴き上がる。チンポから溢れ続けるそれのせいで、ルーカスの身体は水浸しだった。

「上手にできたな……ッ」
「ぉ゛、おるがぁ゛♡おるがぁ♡ぅっ……♡」

ルーカスの泣き顔を見下ろして、オルガは興奮に満ちた低い声で囁く。粗相をしてしまったと混乱してオルガの首に腕を回してしがみつくルーカスに覆いかぶさり、容赦なく腰を振り始めた。

「……おるが！！♡もぅやだ♡♡♡ぁ゛っあ゛♡♡だめっこれ、ッ……♡♡」
「ルーカス、ッルーカス……！！」
「——ッ♡——ッ♡♡——ッ♡お゛ほ、ッッ……♡♡…っ……ッ〜〜！♡♡♡」

組み敷いた身体を太い腕でしっかりと抱き込み、もがくルーカスの肩口に顔を埋めてオルガは腰を振りたくる。雄の本能をむき出しにした本気ピストンに、ルーカスは涙と涎を垂らしながら善がり狂うしかなかった。

「おるがッ♡もぅやめ〞ッ♡おんッ♡♡ぉ〞♡お〞ッ♡♡ッいぐっいぐっイぐイぐッいぐぅ〞……っ！！♡♡」

　白く明滅するルーカスの目に映る景色は部屋の天井だけだ。耳元で獣のように荒い息を繰り返しながら、オルガが名前を呼んでいる。身体を締め付ける腕も突き上げてくる腰も、子供のころからよく知っているはずのオルガなのにこの時ばかりは別人のようだった。

「あ〞ッ♡♡あ〞あ〞ッ！！♡♡ッこわれう〞ッ♡ぉ〞ッ♡も、っぉ〞♡♡ひ、いッ……！！♡♡♡お〞がじぐなるッぐぅう……！！♡♡」

　オルガの背中に爪を立てて縋り付く。それでも必死に懇願するが、オルガは聞いてはくれない。

「ッ、だめっおるがっだめっ、ぅう〞ッ……！！♡♡」

　オルガはルーカスの尻が浮き上がるぐらいに身体を折り曲げ、体重をかけてチンポを奥に捻じ込んだ。これ以上入らないと思っていた奥に圧をかけられ、ぐうううう♡と押し上げられる。

「ん〞ぉお……！？♡♡♡お、おく……ッ！！♡♡もっぉ〞はいらな……ぉ〞う〞ッ！？！♡♡」
「ッ……、出る……ッぅ〞」

　叩きつけるような勢いでオルガが射精する。腹の奥底が濃いザーメンで濡らされていくのを、ルーカスはピクピクと震えながら感じていた。耳元で聞こえるオルガの呻き声にすら煽られて、腹の中でオルガのチンポをしゃぶる肉壁が痙攣する。

「ルーカス……」
「ぁ……♡」

　射精直後の蕩け切った声で囁かれ、食らいつくように唇が塞がれた。トロトロになったルーカスの口内を、オルガが舐めしゃぶって舌を

絡めていく。そうしながらも緩く腰を押し付け、最後の一滴まで腹の奥でザーメンを出し切ろうとしていた。

「んぅっ……♡♡う、ぅう……♡♡」

　孕ませてやると言わんばかりのその動きに、さんざんアクメを繰り返した腰がじゅわり♡と甘く疼く。まるで雄の子種を欲しがるような情動だが、ルーカスはまだそれを自覚できないでいた。